

地味薬師令嬢はもう
契約更新いたしません。①

～ざまあ? 没落?
私には関係ないことです～

◆ ————— ◆
鏑木うりこ

Uriko Kaburagi

◆ 登場人物紹介 ◆

マーガレッタ

ランドレイ侯爵家の元令嬢で、規格外の効力を持った薬を作る事ができる天才薬師。

アーサー

レスセルバーク国の第二王子で、騎士団に所属している。明るく裏表のない性格の持ち主。

グラナッツ

常に優しいが雰囲気をつめたご隠居。

ノエル

リアム王国の王太子。

ロゼライシ

マーガレッタの姉であり、聖女。

ランドレイ侯爵

マーガレッタの父親。

アルティナ

レスセルバーク国
第一王子の婚約者。



目次

地味薬師令嬢はもう契約更新いたしません。
1
くざまあ？ 没落？ 私には関係ないことです

書き下ろし番外編

秋の日にはあなたと焼き菓子

地味薬師令嬢はもう契約更新いたしません。
1
くざまあ？ 没落？ 私には関係ないことです

第一章 地味令嬢、婚約破棄の上、国外追放

私の名前はマーガレッタ・ランドレイ。ランドレイ侯爵家の次女で、リアム王国の王太子、ノエル様の婚約者。

王宮の豪華な広間で行われているノエル様のパーティーに参加していた私は、ノエル様が言い放った言葉を理解できず、壇上に立つ彼の前で立ち尽くしていた。

「マーガレッタ！ お前のような令嬢とも呼べぬ娘を、私の婚約者にしておくわけにはいかない！ お前との婚約を破棄させてもらう！」

「え……？」

突然のことにおろおろする私をよそに、ノエル様の言葉は続く。

「ロゼライン、こちらへ」

「はい……ノエル様」

ノエル様が名前を呼んだのは、一人の美しい女性。

地味な色でレースもない私の質素なドレスとは違い、彼女のドレスは黒を基調とした豪華なもので、純白の服を身に纏うノエル様と対になるよう、純白のシルクと金糸で装飾されている。

絢爛な衣装に身を包んだ彼女も壇上に上がり、自信満々な表情で私を見下ろしノエル様の隣に立つと、彼の腕に手を絡めびったりとくつついた。

まるでこの大陸で広く信仰され、私もよく知る女神フェリーチエ様の寵愛を一身に受けたかのような煌めく姿。

残念ながら、私は彼女のことをよく知っている。彼女は、血の繋がった私の姉だった。

「ロゼライン……お姉様」

「マーガレッタ……酷いわ。いくら私が聖女の資格を得て、人々に慕われているからといって、数々の嫌がらせをしてくるなんて……ノエル様が気づいてくれなかったら、私……」

「嫌がらせ……なんのことですか？ わ、私はそんなこと、しておりません！」

なぜ私がお姉様に嫌がらせをしたことになっているのだろうか。

お姉様の言葉の意味が分からず、思わず大きな声で言い返した。しかしお姉様は眉をつり上げて私の言葉を遮った。

「嘘おっしゃい！ あなたの薬より私の癒しの技が優れていると言って、いつも邪魔をしてくるじゃありませんか！ お兄様もそう思いますよね？」

「ロゼラインの言う通りだ。ノエル殿下がお怒りなのも致し方ないこと。マーガレッタは隠れて嫌がらせをしているつもりなのかもしれないが、私は知っているんだぞ！ 我がランドレイ家の面汚しめ！」

「オ、オリヴァーお兄様まで……なんてこと」

私の後ろに立っていた実の兄、オリヴァーお兄様まで、ロゼラインお姉様の味方になり、私に罵声^{ばせい}を浴びせる。

まさか血の繋がった親族に、謂れのない罪で責められるなんて、思ってもみなかった。たしかに私は家族の中で一人だけとても地味だ。

しはみ色の髪に、緑の瞳。

そんな地味な容姿だからか、家族の中で冷遇されているのは自覚している。

お父様もお母様も美しい金髪で、二人とも青い瞳。お兄様もお姉様も倣ったように金髪に青い瞳だけれども、私の色はお父様のお母様、つまりお祖母様から受け継いだ色だから何もおかしいことはないのに。

「そういうことよ、マーガレッタ！ だからランドレイ家から……いえ、このリアム王

国から出ていってくれないかしら？」

美しく目鼻立ちのはっきりした美女のお姉様が高らかに言い放つと迫力がある。さらには聖女という特別な地位に十年もいるからか、その言葉は人の心に染み渡る。

「ひ、酷いです！ 私たちは血の繋がった家族じゃないですか！」

「家族……あなたと私が？ 冗談でしょう？ その見た目で？ そばかすの浮いた汚い顔。薄汚れた髪で、いつも土にまみれてこそソコソコやっていて……気味が悪い！」

「そ、それは薬草を育てているだけです！」

私が必死にそう言っても、ロゼラインお姉様やオリヴァーお兄様、ノエル様は顔をしかめたまま。周りを見渡すと、お姉様を称賛し、私を蔑む貴族たちの視線が突き刺さる。

「どちらにしろ、私にはお前との婚約を続ける気などない！ その顔を二度と私の前に出すんじゃない、消えろ」

「ノエル様……酷い……」

たしかに私は、実の家族だけでなくノエル様からも冷たく扱われてきた。

美しいお姉様ではなく、地味な私が婚約者と決まった時から、彼の冷たい視線を受けてきたし、無視もたくさんされた。

それでもノエル様にふさわしくなるため、精一杯努力して難しい本を読み、知識を

たぐわ
蓄えた。お父様の言いつけ通り、国の利益を考えて薬草を研究し、効果の高い回復ポーションや、病気を癒すキュアポーションを作り出してきた。

聖女であるロゼラインお姉様のヒールやキュアといった回復魔法はよく効き、一瞬で傷や病を癒すことができるけれど、庶民には到底払えないとても高いお布施が必要である。

使用人や街の人、冒険者などはお布施を払えない人も多いため、私が陰で研究する安価なポーションが必要なのだ。

お姉様より容姿は劣るけれど、真面目に学びポーションを研究しているうちに、少しずつノエル様に認めてもらえていると思っていたのに、彼がそんな風に思っていたなんて。

「う、うう……わ、分かりました……」

悲しくてむなしくて、ほろほろと涙がこぼれる。

そんな私を、ノエル様もお姉様も冷たく見下ろしているし、お兄様は吐き捨てるように追い打ちをかけてきた。

「ふん、醜い女は泣き顔すら醜い」

「酷い……」



もういい。私は十六歳で成人です。ノエル様と婚約して明日でちょうど十年になる。王家とランドレイ侯爵家、そしてこの国のために必死に努力することはやめ、これからは別の国で生きていこう。

幸い私には薬師としての腕があるから、きつとどの国でもやっていけるはずだ。

「……お世話になりました……皆様のお言葉通り、この国から、出ていきます」

なんとか声を振り絞り、意地悪く笑う三人に背を向ける。その時、静観していたお父様が、顔を青くして声をかけてきた。

「マ、マーガレッタ……う、嘘だろう？ この国から出ていくのか？ あ、明日の契約更新は……ど、どど、どうするつもりだ」

お父様がいまさら何を言っているのか分からない。しかも私を慰めるのではなく『契約』の話をしてくるなんて、やっぱりそういうことなんだ。

契約を継続させられれば、私という人間は必要なかったんだ。

少しでもいいから、両親の優しい言葉が欲しかった。そう思うのは贅沢だったのか、と思うと、全身がすうっと冷たくなり、それから新しい涙が迫り上がることはなかった。「父上、いまさらその女に声をかける必要などありません！ 毎日おっしやっていたではありませんか。マーガレッタは私の娘ではないと、あんな醜い娘が自分の子供である

はずがないと！」

私の心を抉るお兄様の声が会場に響く。あまりに酷すぎる追い打ちに、くらりと天地が揺れた気がした。体がフラフラしてほとんど倒れる寸前だけれど、こんな人たちの前で倒れたくなんてない。

氣力を奮い立たせ、なんとか外へ向かう。磨かれた廊下には私の土気色の顔が映っていることだろう。

「黙れ、オリヴァー！ マーガレッタ、契約は……契約の更新はどうするのだ!？」

お父様が何か喚びているけれど、十年前の契約は六歳の何も知らなかった私を騙すようにして結んだものだった。そして今、こんなに馬鹿にされているのに契約の更新なんて、するわけないでしょう……

ついさっきまでお父様を信じていた私は、馬鹿で愚かだった。

今日、婚約破棄されてよかったのかもしれない。明日、契約が更新されてから婚約破棄されたら、もっと悲惨だっただろう。それだけはノエル様に感謝しないと。

ノエル様のお父様である国王陛下は沈黙したまま。

「へ、陛下……マ、マーガレッタが……」

お父様だけが慌てている。そうですか。王家にも私は必要ないということなんだ。

国王陛下も王妃殿下も、ノエル様を止めることもしない、お二人のご意向もそういうことなんだ……もう振り向きたくない。

ああ、部屋に戻って……荷物をまとめて出ていこう。
ランドレイの家からも、この国からも。

足に合っていないヒールの高い靴が滑り、足がもつれた。これ以上あの人たちに醜態を見せたくないのに、私の体は言うことを聞かずにぐらりと大きく傾いてしまう。

「マーガレッタ嬢、大丈夫ですか！」

倒れそうになる私を、飛び出した騎士が支えてくれた。この方は、よくポーションを分けていた方だと思いつく。

訓練が厳しいと有名なこの国の騎士団は怪我人が多く、ポーションを渡すといつも感謝してくれたのを覚えている。

「え、ええ……ありがとうございます」

「……この国を出られるのですか」

「はい、そうするしか……ないようです」

小さな声で確認してくる騎士はとても悲しそうな顔をしたけれど、騎士も私を止めたりはしなかった。

私がノエル様に邪険に扱われていることは騎士団にも知れ渡っているし、彼はこの国に仕える騎士なのだから、王族の命令は絶対には守らなければならない。

「……馬車と呼んであります。それに乗ってランドレイ侯爵邸へ。その後はレッセルバーク国方面に行かれるとよいでしょう」

レッセルバーク国とは今私がいるリアム王国の隣にある大国。

レッセルバーク国にはダンジョンや魔物が多く出現する深い森が多いため、薬師や薬師が作るポーションが大事にされると聞いたことがある。

ポーションを作れる私が向かうのに、ふさわしい国だ。きっとこの方は私の行く末を慮^{おもひが}つて提案してくれたんだ。

「ありがとうございます……そうさせてもらいます。あの、馬車の代金は……」

「騎士団に払わせてください。あなたのおかげで何人もの騎士の命が救われました。王族はどうあれ、私たちは感謝の念しかありません」

騎士の言葉を聞いて、冷たく重い私の心に、ぽつんと温かい火が灯った。

よかった……私の作ったポーションは、命を救えたんだ。私がしていたことは決して無駄なんかじゃなかったんだ……！

「こちらこそ……ありがとうございます。これで胸を張って、この国から出ていけそう

です」

「我々はこの国に仕える者であるがゆえに、これ以上お助けできないのです。誠に申し訳ございません」

いいえ、十分です、と私はゆっくり首を横に振る。

むしろ、追いつかれる私に話しかけた騎士さんが罰せられるかもしれないのが怖い。ノエル様やお姉様たちから叱責しっせきされるかもしれない。

それなのにこうやって私を助けてくれて、とても嬉しい。

「いえ……。団長様に感謝をお伝えくださいませ」

「かしこまりました」

騎士と別れ、私は煌びやかな王宮を、侮蔑と好奇の視線の嵐の中、後にする。名だたる貴族の馬車が並ぶ場所に着いた私は、その場所の中でも王宮から最も遠いところにいる、騎士団が用意してくれた馬車を見つけた。

素早く馬車に乗り込むと、御者ごしやさんは私の顔を見て不思議そうに首を傾かしげた。

「あんた、薬師のマーガレッタ・ランドレイだろ？ 一体どうしたんだい。騎士の人からあんたを乗せて、ランドレイ家に寄って隣の国まで行けって、言われてんだけど」
御者さんが訝いぶかる。

たしかに女の子が一人で王宮から出てきて、家に寄ってから隣の国へ行く……なんて普通はないだろう。不審がられて当然だと思う。

「私……この国を追いつちやっただけです」

「な、なんだって!？」

御者さんの大声に、馬たちが驚いて耳をびくつかせる。

「それで隣の国に行こうかと思ひまして……」

「す、するってえと、あんたのポジションは隣の国に行かなきゃ買えなくなるってことか!？」

「え？ ええ、この国にある在庫が切れたらそうなりますね」

こ、こりや恐ろしいことが起こるぞ、と御者さんはブツブツと呟つぶき始めた。そうしながら御者さんは目を閉じていたが、少しして勢いよく顔を上げた。

「お嬢さんや。ランドレイ家を出たら、ちょこつとギルドへも寄っていいこう。隣の国までは結構距離があるから、冒険者を何人か連れてったほうが安全だ」

「でも私、冒険者の方を雇うお金なんてありません……」

あいにく、私は冒険者を雇うような大金を持っていない。なけなしの宝飾品を売れば、この馬車の運賃くらいはなんとかなるかなと思うけれど。

「その辺は俺がなんとかするから、お嬢さんは馬車に乗ったまま待っていてくれ。ちょっといいから！」

「そ、それなら……」

御者さんの勢いがすごく、私はつい頷いてしまった。

「よっし、そうと決まればさっさと行くぞ！」

「きゃっ！」

私を乗せた馬車は勢いよく走り出し、ガラガラと車輪の音を激しく鳴らす。嫌味や蔑んだ視線に晒されながらも何度も訪れた王宮が遠ざかっていく。でも、もう行くことはないと思うと、なぜか悲しみがこみ上げてきた。

少しでもノエル様に好かれようと努力したあの日々はなんだったのか。

視界が涙でばやける。令嬢の端くれとして大勢の前ではなんとか堪えていたものが、一人になって落ち着いて、あふれ出してきたようだ。

「うう……うう……どうして……」

馬車には私しかないし、王都の整った石畳とはいえ、急ぐ馬車の音は大きいから、中の音なんて誰にも聞こえやしない。

私はドレスの裾を握り締めて、家に着くまで泣き続けた。

「お嬢様!？」

家に着くと、執事やメイドたちが驚きながら駆け寄ってきた。

心配そうな皆の一番前に、ランドレイ侯爵家の執事長、トマスがいる。

「私……ノエル様から婚約破棄を言い渡され……国も出るように宣告されました」

「……いつかこんな日がくるのではないかと思っております」

私が俯きながらトマスに小さな声でそう伝えると、トマスは心底残念そうに呟いた。それに同調するように、周りの皆も頷く。

彼らは私が家族やノエル様から冷たく扱われていたのを知っていて、きっといつかこんなことになる、予想していたのかもしれない。

「マーガレッタお嬢様……契約はどうなさるのですか」

トマスは私が小さな頃からこの家に仕えているから、私の契約のことも知っている。そしてその契約が切れる日も。

「しないわ……さすがに無理よ」

「そう……そうでございますね……分かりました」

トマスは残念そうに、しかし安堵したようにため息をつき、そして微笑んだ。

「そのほうがよいでしょう。お嬢様お一人が犠牲になるのはおかしいと、私たちは昔から思っておりますから」

「……ありがとう、トマス」

その優しい笑顔に少しでも救われた。この笑顔のおかげでこれまでなんとかこの家ですべてこられたのだろう。

「ならば、旦那様たちがお戻りになる前に荷物をまとめて、出ていかれるほうがよいと思いますね」

「……そう、ね」

トマスは、私が契約のことを知る誰かに引きとめられることを心配しているんだろう。大丈夫よ、きっと誰も引きとめない。

家族もノエル様も、私のことなど必要ではないのだから。

「皆、お嬢様のお荷物をおまとめして。あと何か食べるものと……動きやすい服装に着替えましょう」

トマスの声でメイドたちが辛い表情を浮かべたまま忙しく動き始める。

私のために忙しくさせてなんだか申し訳ないけれど、一人で準備しては、いつ出発できるか分からないからとても助かる。

「お嬢様の作ったお菓でメイドやその家族が何人も救われました。私たちは全員、マーガレッタお嬢様の味方です」

「ありがとう……トマス。皆も」

この屋敷の使用人は皆、優しい。私は受けた優しさに応えただけなのだが、こう言ってくれるとなんだか誇らしい気持ちになるし、この家で暮らせてよかったと思える。

「お幸せになってくださいませ！」

荷物をまとめて家を出る準備ができると、玄関に使用人が出てきて、頭を下げて見送ってくれた。私よりも辛い表情の皆にこれ以上心配をかけたくなくて、私は頑張って笑顔を浮かべて馬車へ戻った。

「使用人に好かれてるんだな」

「ええ……」

馬車で待っていてくれた御者さんに返事をしながら、私はため息をつく。見ないようにしていた現実を突きつけられ、心が暗く沈んでいく。

私は家族やノエル様たちに何をしたのだろうか。彼らと仲良くなれるように頑張ったつもりだったのに。

ランドレイ侯爵邸を出発して馬車は街の中を走り、冒険者ギルドの前で止まった。御

者さんはちよつとだけ待つてな、と言って入っていき、言葉通り本当にすぐに出てきた。御者さんが馬車を動かし始めると同時に、冒険者ギルドの敷地から一台の幌馬車^{ほろ}がやつてくる。それは、私たちの馬車についてきた。

「あ、あの……後ろの馬車って……」

「ああ。あの幌馬車に、あんたの護衛をする冒険者が乗ってるんだ」

「え？ 本当ですか？」

冒険者との交渉ってそんなにすぐできるものでしたっけ、と半信半疑だったけれど、その後小休憩を取った時に、幌馬車から厳^{いか}つい鎧や大きな剣をぶら下げた人たちが出てきて、御者さんの言ったことは本当だったと少し驚いた。

「あんたがマーガレッタお嬢様？ この花がついたポーシオンを作った人？」

「え、ええ。瓶にマーガレットの花の型がついているなら、私が作ったものです」

私に話しかけてきたのは、とても大きな剣を背負った男性。見上げないとまともに顔を見られないほど背が高く、筋肉質でいかにも冒険者といった雰囲気の人だ。

初級^{こわもて}ポーシオンの瓶を握っているが、見慣れたあの瓶は間違いなく私が作ったものだ。強面で少し怖いけど、破顔という言葉が似合う笑顔を見せてくれて、安心した。

「そうか！ ありがとう、あんたのおかげで俺の腕はくっついて、まだ仕事ができい

るよ」

彼が袖をめくって見せてくれたのは太い丸太みたいな右腕。彼の二の腕には大きな傷痕がぐるりと残っていて、酷い怪我を負ったことが分かった。

「クリティカルマンティスつちゅーでかい虫がいてな、そいつに腕を飛ばされたんだ。もう駄目だと思ったんだが、あんたの特級ポーシオンのおかげでくっついたんだよ」

「と、飛ばされた!? そしてく、くっついた!?」

そんなことがあったなんて、と私は目を瞠^{みは}る。

巨大昆虫は珍しい魔物でかなり強く、ギルドが決める魔物の強さランキングのかなり上に位置することは、本で読んで知っていた。

そして私を作る一番効果の強い特級ポーシオンにそういう効能があることは分かっていたけれど、実際に目の当たりにしたのは初めてだった。

この男性はそんな恐ろしい魔物と戦うことができる凄腕のようだ。そんな方が護衛についてくれるなんて、と改めて驚いていると、男性の後ろから何人もの冒険者が顔を出した。

「アタシは目玉よ！ 魔法使いなのに目をやられちゃってね、ほんと助かったわ！ 何せ目が見えないと魔導書が読めないでしょ？」

「俺は足！」

「俺は腹を真つ二つにされた！」

「私なんて顔が命の吟遊詩人なのに、顔をぶつ飛ばされましたからね」

ちよ、ちよと……待ってください！ にこにこ笑いながらとんでもないことを話した人たちの話を聞いて、血の気が引く。目や顔……嘘でしょ？

「こらお前ら。貴族のお嬢さんに、なに血なまぐさい話してるんだ！」

「「あ」」」

思いつき、その光景を想像してしまった……。私の顔は酷く真つ青なのだろう。冒険者の皆さんは必死に謝ってくれた。

休憩を終えて再び馬車が走り出す。

辺りは日が傾き、空が暗くなり始める。そんな中、私は同じ馬車に乗ることになった戦士さん、女性の魔法使いさん、吟遊詩人さんに話しかけた。

「私のポーションに感謝していただいたのはとても嬉しいのですが……どうして隣の国まで護衛してくださるのですか？」

私のポーションを使ったことがあるということだったが、私じゃない薬師が作る同じ

ようなポーションは少なからずある。

こんなに私によくしてくれる理由を知りたかった。

魔法使いさんと吟遊詩人さんは顔を見合わせてから、リーダーらしき戦士の人を見る。戦士さんはほりほりと派手に頭をかき、口を開いた。

「……ああ、もう！ 黙ってるのは騙してるみたいで嫌だから言うぜ！ 俺たちはお嬢さんが作ったポーションを買いたいんだ。だから、隣の国のどこで店を開くのかとかを知りたいんだよ！」

「え？」

「そうなの、私も下心いっぱいでごめんなさい……。でもお花印のポーションがあるのとないのじゃ全然安心感が違うし、あなたのポーションが買えなくなるのは冒険者にとって死活問題なのよ」

「マーガレッタさんのポーションは、普通のポーションの五十倍の値段でも、効果は百倍ですから、いくつでも欲しいんです」

え、私のポーションってそんなに高いんですか？ お父様は普通の値段で売っていると言っていたから、何かの間違いだと思うんだけど……

「普通の値段で卸しているので、お値段は他のと変わらないはずですけど……？」

「取り合いになったら、どんなものでも高くなるんだよ」

「知らぬは制作者ばかりなりつてことね。どっかで儲けをピンハネしてるんじゃない？」

「絶対やってます……もしかしして、酷い環境で作っていたのではありませんか？」

冒険者の皆さんは顔をしかめた。

心当たりがなくてただただ驚いていると、冒険者たちは一斉にため息をついた。

「……こりゃ、心配だなあ」

「誰か、レッセルバークに貴族の知り合いがいらない？ なるべく偉い人」

「あー……ちよつと何人かに当たってみます」

「ホント、心配だよ。お嬢さん、よくしてくれるからって、知らない人についてっちゃ駄目だからな？」

「わ、私はそんな子供ではないです！」

もう十六歳だし、子供扱いされたくはない。たしかに一人で暮らせるかは不安だけれども、知らない人になんてついていけないです！

「いやあ……これは御者のハンセンのお手柄だわ」

「こんな純粋な子が一人でうろついていたら、すぐに騙されるだろうな」

「だろう？ 俺はそういうことによく気がつくんだよ」

ぐるりと振り返って御者さんまで他の人に同意してしまった。馬車の中では笑いが起きて、私もつられて笑ってしまう。

ふと、馬車の後方、進んできたほうへ視線を向ける。

今はまだ聞こえないけれど、きつと明日、起こる。私が国を出たのだから。きつとりアム王国では、とんでもないことが起きるはずだ。

でも深く考えることはやめた。

あの国がどうなっても……ノエル様やお姉様がどうなっても、ランドレイ家がどうなっても……私にはもう関係のないことなのだから。

馬車は不穏な雰囲気を漂わせる夜の森を走り、リアム王国とレッセルバーク国との国境付近に着いた。

国境は森に囲まれている。聞き慣れた人々の喧騒はなく、ガラガラと大きく鳴り響く車輪の音や、風に揺れて葉がこすれる音が耳に入る。

時折聞こえる動物の遠吠えと、驚いて飛び立つ鳥らしきものの影。

王都で暮らしていた私は、すべて初めて見聞きするもので……思わず不安と恐怖でスカートをぎゅつと握り込んだ。

「大丈夫よ、そのために私たちがいるんだから」

「ありがとうございます」

魔法使いさん——メリンダと名乗った女性は笑って、私が膝の上で握り締めていた手に手を重ねる。彼女の手のひらはほっとする温かさだった。

……本当に一人じゃなくてよかった。夜の森がこんなに怖いなんて知らなかった。

「見えた、国境警備所だ」

御者さん——ハンセンさんの声が聞こえた。

ここを越えて、私は生まれ育った国を出ていくんだ。それを意識すると、不安が大きく膨れ上がって襲い掛かってくる。

……どうしよう、私は一人で大丈夫なんだろうか。怖い、とても怖い……

揺れる馬車の中で戦士さん——カールさんが窓に手をかける。走る馬車の窓を開けるのは危険だと本で読んだけど、彼はなんの躊躇もなく窓を開けた。そしてさらに危ないことに、窓から半身を出し、遠くにある国境警備所に向かって大きく叫んだ。

「おい！ そっちの国に入れてくれ!!」

「は!？」

国境の警備員さんたちの驚きの声が聞こえる。

「な！ お前、そんなこと言っても身分と許可証を——」

「俺が入れるって言ってたから入れろ！ ほらこれ！」

カールさんは何かのカードを取り出して、遠くから警備員さんたちに見せる。どうやら冒険者証らしいが、なんだかとてもキラキラしている。冒険者証というものを初めて見たのだけれど、すごく綺麗で、思わず見入ってしまった。

「S級冒険者のカールだ！」

「カール？ あの『双大剣のカール』か！」

カールさんの声を聞いて、警備員さんたちはすぐに道を開けた。

カールさんが警備員さんたちにお礼を言っている最中も馬車は速度を落とすことなく、私たちはあっさりと国境を越えてしまった。

S級という肩書きもそうだが、警備員さんたちとのやり取りを見るに、もしかしてカールさんってすごい実力者なんだろうか？

そんなことを思っていると、馬車が止まった。

本で読んだ限りでは、国境を越える時には身元確認や持ち物検査があるらしい。でもそういうのは国境を越える前にやることで、通ってからではなかったはず。検査を後回しにしてまで、こちらの国に入りたい理由がカールさんにはあったのだろうか。

馬車の中で何が起きるのかとドキドキしていると、カールさんは慣れた様子で馬車から降りて、集まってきた警備員さんたちと話し始めた。

……やはり国境の越え方が普段とは違ったのだろうか。警備員さんの表情は芳しく^{かんば}ない。

隣に座るメリンダさんは呪文のようなものを呟くと、誰かと話をし始めた。

「なあに、皆に任せておけば問題ないですよ。カールさんはガサツだけど、ああ見えて頼りになりますから。よろしければ、歌でも歌いましょうか？ 私の歌を聞けば大抵の魔物も一発で眠りにつきますよ、味方もだけど」

吟遊詩人さん——トリルさんが呑気にあくびをしながら言うので、私は緊張がほぐれた。だが楽器を取り出して歌いそうだったので、それはやめてもらった。

そんなことをしていると、メリンダさんが話を切り上げて、カールさんに手を振る。

「カールさん、グラナツツ爺と連絡取れたー！ この子に会わせろってさ」

「グラ爺か、いいな。兄ちゃんたち、無理に通って悪かったな。ちよいと訳アリだね……責任はグラナツツの爺さんが取ってくれるから、兄ちゃんたちは心配しなくていい」

少しだけざわざわしていた警備員さんたちは、顔を見合わせやれやれといった表情を

浮かべる。さらにカールさんの大声を聞きつけて、警備員さんたちの詰所のような場所から、偉そうな身なりの大柄な男性がのそりと出てきた。

出てきた人はおっとりとした熊のようにも見えるけれど、きつと強い人なんだろう。

男性は私やカールさん、皆さんの姿を一瞥して「ふむ」と一つため息をついて腕を組んだ。

「カールさんの連れなら通さないわけにもいかないが……急ぎなのか？」

「ああ。隊長さん、実はな……」

カールさんは隊長さんと呼んだ大柄な男性に近づき二言三言耳打ちをしたが、それを聞くなり隊長さんはすぐに頷いた。

「なるほど、なら歓迎だ。目的地までどうぞお気をつけて」

隊長さんは、笑顔で手を振ってくれた。どうやら怖い人ではなかったようだ。

「ありがとうございます！」

私もお礼を言うけれど、カールさんが戻ると馬車はすぐに走り始め、それ以上話ではできなかった。馬車から身を乗り出し隊長さんを振り返ると、途切れ途切れに声が風に乘ってきた。

「近々お客さんが来るかもしれん、気を抜くなよ！」

「はっ！」

お客さん……一体誰なんだろう。国境は人がたくさん通過するし、こんな夜中でも高貴な人が来るのかな……？

それにしても、国境越えは想像以上にあっさりで、拍子抜けしてしまった。カールさんがこの隊長と知り合いだったようだから、きつとそのおかげで簡単に通れたんだろう。

他の冒険者さんたちも強そうで頼りがいがあるし、私はとても幸運なんだ、と馬車に揺られながら、私はしみじみと実感していた。



そうして私たちは、メリンダさんとカールさんが話していた「グラナツ爺さん」という方のお家——いえ、お屋敷に着き、豪華な応接間に通された。

お屋敷の内装や調度品は……どれも洗練されていて高価なものばかり。

侯爵邸にも家具や絵画、置物などは値の張るものが置いてあつたけれど……このお屋敷はなんというか、格が違う。

廊下に置かれている飾り壺も、廊下にかかっている絵画もすべて一流のもので、王宮にあってもおかしくないものばかりだ。

そして私たちが通された応接間もまたすごい。

座ってくれと言われて腰を下ろしたこのソファも相当高級品ですよ、これ！

座り心地は柔らかすぎず、かといって硬いわけでもない。しかも使ってある表材が一流のものなので、手触りがとてもいい。腰を下ろすのをためらうほどだ。

目の前にいるおじいちゃんは、そのソファにどっかりと座り、私に優しい視線を向けた。

「さて、このお嬢さんがリアム王国の天才薬師、マーガレッタ・ランドレイさん、かう？」

「あ、あの……私はたしかにリアム王国に住んでいたマーガレッタですが、天才ではなく、ただの薬師で……」

天才薬師って誰ですか？ 私はポーシヨンの類しか作れません。

「ほ……？」

おじいちゃん——グラナツさんは、目を丸くする。驚くグラナツさんはなんだかとっても可愛らしくて見ていて飽きない。

グラナツツさんは年配の方で、真っ白い髪を後ろに撫でつけている。貫禄があるのに笑い皺のある目元がとても優しいおじいちゃんだ。

お年のせいもあるのか、ちよつとだけ身長が低く見えて、それが可愛らしさに拍車をかけている。

「グラ爺。どうやら『知らぬは制作者ばかりなり』みたいだぜ。この花がついてるポーションが、普通のポーションの五十倍の値がついてるのを知らなかったし」

「いや、カール坊。我が国レッセルバークではその二百倍の値段が普通じゃよ。特級ポーションに至っては王家に献上するレベルじゃ」

カールさんが自分の鞆から取り出した初級ポーションには、マーガレットの花の刻印がある。それは間違いなく私が作ったものだ。

でも私のポーションが二百倍の高値になるなんてあるわけがない。

あ、そうか。二人とも私が小娘だからからかっているんだ！

そっちがその気なら、からかってみましようか。

私だってやる時はやるんです。

「あら、そんなにお高いなら、手持ちのポーションを買い取ってもらえませんか？」

通常の二百倍なんて値段で売れたら私は大金持ちになってしまいうし、王家に献上とか

本当にあり得ない。

毎週何百本もお父様が卸していてその全部が家の収入になっていたから、私には一

ゴールドも入ってきたことはないから値段は良く分からないけれど……

そんなに高額だったのなら、少しくらい私にお小遣いをくれるはずだ。

私は家を出る時に持ってきた在庫のポーションを、コトリ、コトリとこれまた高級な一枚板のテーブルの上に並べていく。テーブルに傷をつけないように、ゆっくりゆつくりと。

しかしその私の気遣いもむなしく、カールさんとグラナツツさんは勢いよく立ち上がった。ガタガタとテーブルの上のポーションが倒れてしまった。

テーブルに傷がついてしまう！

「ポ、ポーションを持つてるのか!? 買う! 全部俺が買う!」

「カール、黙れ! わしが全部買うんじゃッ!!」

「ひいっ!」

な、なんですか、二人とも。急に目の色を変えて立ち上がって怖いです！

私は彼らの迫力に竦み上がり、持っていたポーションを手から滑らせた。

「あっ!」

「うわあああああああ！俺のポーション！」
 ポーションが床に叩きつけられる前に、素早い動きでカールさんがキャッチして事なきを得た。けれどカールさん、私のポーションです、それ。

「特級が二本に……最高級が五本、高級が十本、残り初級が十本……グラ爺、半分——」

「馬鹿拔かせ、もう少しわしに譲らんかい」

「いや待て、俺らはこれからこれが必要になるんだよ」

「いやいや、特級はすぐ王宮へ持つていく。妃殿下が体調を崩して久しいからのう……」
 あれ、さっきのは冗談なんですよ？

ポーションの取り分を相談している二人があまりにも真剣で、笑いが引っ込んでしまった。なんだか怖くなつてきて、私は恐る恐る二人に声をかけた。

「あ、あの……」

「すぐ金を持つてくるから、安心してくれ。いやまさかやっぱり売りたいとか!?頼むよー、実物を出しておいてそりやないだろう?」

カールさんが頭を抱えて慌てる。そして、テーブルの上に並べたポーションを太くて長い両腕で囲う。

いや、別に売りたいとかは言いませんって……

「いえ、そうではないのですが」

「では遠慮なく！ウエルス、金を持つてきてくれ。しかしこれを全部金にするとかさばるの……マーガレッタ嬢、どこかのギルドの通帳などは持つておるかね?」

グラナツツさんも、優しくそう言うけれど、目だけは真剣だ。本当に冗談……じゃないんでしょか……

私のお金はすべてお父様が管理していたから、通帳は持つていない。それにしても、かさばるほどのお金って一体いくらなのだろう。

私は首を横に振って答える。

「申し訳ありません。実はそういうものを持つていなくて……」

「では早急に作ったほうがいい。マーガレッタ嬢に支払うポーション代は少しの間、我が家で預かっておこう。ウエルス、証書用の紙とペンを」

グラナツツさんがそう言うのと、グラナツツさんの執事、ウエルスさんが、明らかに高そうな紙とペンを持つてくる。

そしてその紙に見たこともない桁^{けた}の金額をサラサラと書いた。

私は一瞬で大金持ちになったみたいだけど、実感がない。こんな大きなお金、生まれ

て初めて手にするし……

でもそんなことより、私は自分自身の今後についてのほうが気になっている。

この国では、私は受け入れてもらえるだろうか。

こんなに大量のお金があったら、しばらくはどこかの宿に泊まれると思うけど、それも一生は続かないだろうし……

「あの……」

私の不安が伝わったのか、私を見ていたカールさんはハツとして、グラナッツさんを見た。

「あ、グラ爺！ ポーシヨンに夢中になって俺たちお嬢さんの話を聞くの忘れてるぜ」

「おお、そうだった！ すまん、マーガレッタ嬢。……どうかマーガレッタ嬢の身に何が起こったか教えてもらえんじやろうか……必ず力になるぞ」

二人の優しい視線に、どうしようか、悩んだ。私はこの国に知り合いがいらないから、頼れるのはグラナッツさんやカールさんたちだけ。

皆さん初めて会った人たちだけど、なんとなく信じられそうだと思ったから、私の身に起きたことを話すことにした。

話すうちに二人の表情がどんどん曇っていく。

「……なんと、リアム王国の有名貴族、ランドレイ侯爵家のご息女の一人がマーガレッタ嬢だったとは……」

「そしていろいろな事情で国を出ることになった、と」

「マーガレッタ嬢は、このレッセルバークに居を移したい、ということではないのかね？」
グラナッツさんとカールさんは真剣に私の話を聞いてくれて、私が言いたくなくてぼかしたところは、深く聞かないでいてくれた。

この人たちは、追い出された私に、こんなに親身になってくれる。しかもリアム王国の婚約者や、長い間一緒に暮らしてきた家族よりも、ずっと。——悲しいけれどそうだった。

私は目頭が熱くなるのを感じながら、二人の言葉に頷いた。

「ええ、そのつもりで来ました。この国は森に囲まれて魔獣が多く、さらに大きなダンジョンもあると本で読んだんです。それなら私が唯一作れるポーシヨンがよく売れるのではないかと……」

「それは正しい認識じゃ。ポーシヨン不足は我が国が抱える大問題だからのう」

「そうだな、神殿の癒し手たちも毎日毎日大忙しだから、怪我をしても頼みづらいんだよなあ」

グラナツツさんとカールさんは顔を見合わせて「はあ」と大きくため息をつく。
「しかし、冒険者たちに退治してもらわねばならぬ魔獣はとて多く、ポーションの需要は上がるばかりじゃ……もしマーガレッタ嬢がこの国に移住するのであれば、大歓迎はしても反対する者などおらんよ。もちろんわしらもな」

「こつちから頼みたいぜ。あ、でも、住んでから決めたほうがいいと思うぜ。思ってたのと違う、ってこともあるしな」

「そうじゃのう、カール坊にしてはいいこと言うのう」

「だろうだろー！」とカールさんは気持ちよさそうに笑う。グラナツツさんも愉快そうに笑っている。

きつと不安でいっぱい私の私に、気を遣ってわざと明るく振る舞ってくれてるんだ。

こんなに優しい人が住んでいる国なら私も暮らしていけそうな気がして、少しだけ未来が明るくなった気がした。

「こちらこそ、よろしく願います」

私は立ち上がってぺこりと頭を下げる。ここに住んでこの人たちの力になれるなら、ぜひ移住させてもらいたい。

その後、これからの住まいやら仕事やらを三人で考えた結果、しばらくの間は、この

お年の割に澁刺^{はつらつ}としたおじいちゃんこと、グラナツツさんの家に居候^{いそうろう}させてもらうことになった。

「可愛い孫ができた！ いや、本当に孫にならんかのう……？」

「孫だなんて、そんな……」

居候するにあたってお話を聞くと、グラナツツさんは貴族のご隠居様だった。

「あの、姓のほうをお聞きしても？」

「それはそのうち、な。ところで、わしには孫が一人いるのだが男で……女の子の孫がおつたら華やかでいいんじゃない？」

もしかしたら名のある貴族かも……と思ひ、聞いてみたが、濁されてしまった。

グラナツツさんにも事情があるのかもしれないけれど、今の私は知らなくてもいいのだらう。だって、目の前のグラナツツさんは私を騙そうとか、自分の都合のいいようにこき使つてやろうとか、そんな感じはまったくないから。

私はにこにこ笑うグラナツツさんに釣られて、笑いながら過ごした。

お話が一段落すると、このお屋敷のメイド、ロジーさんがやってきた。

「大胆那樣、お嬢様は旅でお疲れですよ。お話しながらまた明日になさってはいかがで

しょう?」

「そうか、ならちようどいい。俺も宿に戻るぜ」

カールさんは立ち上がり、伸びをした。

「カールさんはグラナツツさんのお屋敷に泊まるわけではないんですね」

「まあな。貴族の屋敷の柔らけえベッドじゃ、寝た気がしねえんだ!」

私にはよく分からない理由だったけれど、カールさんが言うならそうなんだろう。カールさんは、じゃあな、と手を振って出ていってしまった。

「マーガレッタ様。お部屋をご用意いたしました。お風呂の準備もできておりますので、お手伝いいたします。どうぞ、こちらへ」

「そ、そんなお風呂なんてもったいない……」

ロジーさんは素敵な提案をしてくれたのだけれど、私にそんな手間をかけてくれるなんて、なんだか申し訳ない。

私が首を横に振ろうとすると、グラナツツさんがにこにこ声をかけてきた。

「マーガレッタ嬢。どうかロジーに世話をさせてやっておくれ。普段、ロジーは爺の世話しかせんから、女の子の世話がしたいんじゃろう、な?」

「そうですわ、マーガレッタ様。お若い令嬢のお世話なんて久しぶりでワクワクいたし

ます! ささ、こちらへ!」

「あの、あの……!?!」

私はロジーさんに連れられて応接間を退出した。どうやら私の遠慮は完全に無視されたようだ。

そして、実家にいる時より好待遇でお世話をされてしまった。

実家にいる時も使用人の皆は大事にしてくれたけれど、それがお姉様やお母様にバレると嫌味を言われたり、辛く当たられたりするので、申し訳ない気持ちでいっぱいになったものだ。

ありがたきお風呂をいただき持ってきた服に着替えようとすると、ロジーさんが新しいワンピースを何着も持ってきてくれた。

「流行りのものを見繕いましたが、お気に召すものはございますか?」

動きやすそうな服から、ゆったりできそうな寝間着まであって、びっくりしてしまう。しかもこの服、私がお父様に与えられた服より何倍も良いものだ。

シンプルな作りながら手触りがいいし、襟元や袖口に細かなレースや刺繍が施しゅうされている。きつとどこかの有名なお店の一点ものだ。

「……ありがとうございます……!!」

ロジーさんが持つてきてくれた服のうち、私は、自分には少し可愛すぎるかも、というワンピースに着替える。きつとグラナツツさんがロジーさんに言ってくれたんだ、とグラナツツさんにお礼を言いに行くと、目を細めて笑ってくれた。

「いいんじゃないよ。それにしても可愛いのうち……やっぱりわしの孫に……」

「あははは……」

そんなグラナツツさんの隣で、お疲れでしょう、とロジーさんが軽食を用意してくれて、その後はとても綺麗に整えられた部屋に案内してもらった。

そっとベッドに腰を下ろすととてもふかふかで、あまりの気持ちよさに思わず寝転び、うんと大きく伸びをする。

「いいのかな……」

外はもう夜になっていて、月が昇り、動き……そして今日が終わる。今日という日が終われば、契約が切れる。十年前、騙されるように結んだ契約が、完全に終了する。

「ううん、いいんだよね。だって、お父様もお兄様もお姉様もノエル様も……私はいらないとおっしゃった。つまり、契約はもう必要ないってことなんだよね」

リアム王国やお父様たちにとつてどうしても契約が必要なものだったなら、私を国から追い出したりなどしないはず。

かなり大きくて強いものをノエル様やお父様たちにお貸ししていたけれど、もう必要なくなったのだらう。だから契約の更新をしなかったのだ。

ベッドに寝転ぶ私の視界に、カーテンの隙間越しの夜空が見える。

まん丸の月が少しずつ夜空を昇っていく。そして天頂にたどり着いた。それは、日を跨いだ、ということだ。

それと同時に、視界はふわふわと光が現れ、たくさんの方が聞こえ始めた。

〈マーガレッタ……久しぶりね〉

〈やっとマーガレッタのところに戻ってこられた〉

〈今度はあんな契約しちゃうだめよ……。もう分かっているとと思うけれど〉

〈あの頃のマーガレッタには拒否できなかったよな……〉

「ああ、お帰りなさいませ……『みなさま』。ええ、もう大丈夫。十年前の私とは違います。今度はもう……あんな契約は結びません」

〈それを聞いて安心したわ。今度は自分のために上手に使ってね〉

〈あなたのための力なんだから、あなたは使っているのよ？〉

〈そうだが、マーガレッタ。お前が使うんだ〉

〈ま、間違いも時には仕方なし。そうやって人間は成長するんだから〉

『みなさま』の声が聞こえ安心した私は、そのまま目を瞑り、夢の世界に旅立った。



私はランドレイ家で執事見習いをしているエドワードと申します。

ランドレイ侯爵夫人であるアイリス様の実家からやってきた執事見習いで、ランドレイ家の執事長であるトマスさんの補助として執事の仕事を学ぶために、少し前からランドレイ侯爵邸で働かせていただいております。

今日は王宮で大切なパーティーということで、ランドレイ侯爵家の皆様でお出かけです。私はトマスさんの代理として皆様についてまいりました。

しかしそこで、とんでもない事件が起きました。

「マーガレッタ！ お前のような令嬢とも呼べぬ娘を、私の婚約者にしておくわけにはいかない！ お前との婚約を破棄させてもらう！」

よく通る声で朗々と、ノエル殿下がマーガレッタお嬢様との婚約破棄を宣言し、聖女であるロゼラインお嬢様を婚約者にすると言言されたのです！

い、一体、何が起きているのでしょうか!?

国王陛下を見ると、ぽかんと口を開けていらっしやいます。これは、予定になかったことなのでしょう。ですが、ロゼラインお嬢様とノエル様——寄り添う二人はまるで一枚の美しい絵画のようです。

燭台とシャンデリアの光でキラキラと二人の衣装が輝き、すべての出席者の目を引いていて、私もうつとりと眺めてしまいました。

二人の煌めきは、まるでこの国とランドレイ侯爵家がますます繁栄していくことを示唆しているようです。

それなのに、私の前に立つ旦那様の顔色は青ざめておりました。この発表のことを旦那様はご存じなかったようで、慌てているように見えます。

「な、何を……殿下は何を言っておられるのだ!!」

ノエル様は旦那様と同じく、日頃から地味な見た目のマーガレッタお嬢様を軽んじていましたが、さすがに婚約破棄に至るとは予想外だったのでしょうか。

「で、殿下はお忘れなのか。なぜ殿下がマーガレッタと婚約なされたか！」

旦那様は呆然とそう呟きました。

婚約なさった時には、事情や政略があったのでしょうか、どちらにせよノエル様の婚約者はランドレイ家の令嬢なのだから、そこまでランドレイ侯爵家に損失はないはず

です。

「あなた、よいのではありませんか。地味なマーガレッタよりロゼラインのほうが王妃にふさわしいでしょう？」

「ア、アイリス……駄目なのだ、殿下の婚約者はマーガレッタでなくては……」

「なぜです!? あなたも日頃から言っていたではないですか。マーガレッタではなくロゼラインが王太子殿下の婚約者だったらよかったのに、と」

奥様のおっしゃることはもともとですが、旦那様は奥様の言葉を否定なさいます。もしかして、奥様も知らない『何か』があるのでしょうか？

日が浅い一介の使用人であり、執事見習いの私には見当もつきません。

旦那様が唸^{うな}っているうちに、ロゼラインお嬢様もマーガレッタお嬢様を邪魔だと言い、長男のオリヴァー様もノエル様に追随し始めました。

「や、やめろ……やめるんだ、ロゼライン、オリヴァー! こ、このままではマーガレッタが……マーガレッタが……」

「あなた。マーガレッタがいなくても我が家は問題ありませんわ。聖女のロゼラインがノエル様の婚約者に、そして我が家の跡継ぎには優秀なオリヴァーがおりますもの。我がランドレイ家は安泰です。あなたもご存じでしょう? オリヴァーは剣の腕だけでなく

く、頭もいいのですからね!」

「駄目だ、アイリス。マーガレッタは我が家に必要な娘なのだ!」

旦那様は歩み出て、お嬢様たちを止めようとしますが、奥様に腕を取られ押しとどめられてしまいました。

「いまさら何をおっしゃいますか。マーガレッタはいらない子供だと、あれほど言っていたあなたが、今日に限ってあの子の肩を持つなど」

「アイリス……マーガレッタとて私たちの娘——私たちの『とても使える娘』なのだ」私はあまりマーガレッタお嬢様と話をしたことはございません。関わりなくてよい、と旦那様と奥様から言いつけられたので、顔合わせすらしておりません。

なので私は、マーガレッタお嬢様がどんなお方かは分かりません。ですが、旦那様がおっしゃるのなら、『とても使える娘』なのでしょう。貴族の家には執事が口を出してはならない境界線というものがありませんから。

「あの子の薬師としての能力は高いですが……あの子だけ地味な茶色の髪じゃないですか! あなただつてあの子だけ私たちと違うと思っているから、あの子にだけ冷たくしていたんでしょう?」

「ち、違う……」